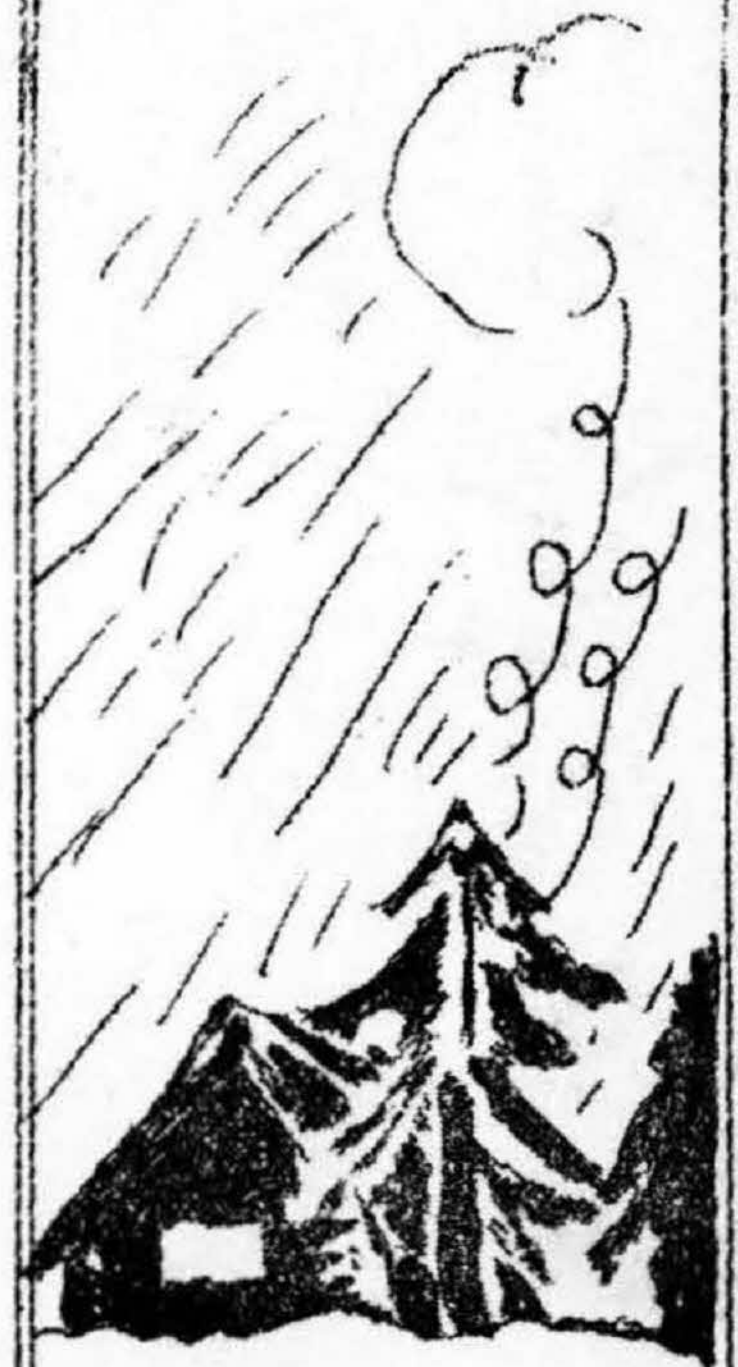


會報



号四第年一第

葛城山、金剛山縦走

吹田発（五、三〇）—大阪（五、四〇）—大鉄阿部野発
（六、二三）—全富田林（七、一〇）—上石川橋—上東條
橋—平石村（八、二五）—全葛城登山口（八、三五）—
八、五五）—胎内潜り岩（九、三五）—六、二四米の峠
（九、五〇）—葛城三角点（二、五〇）—（二、一五）—水越
峠（一、〇〇）—急ノ登り終り（三、〇〇）—金剛山葛木
神社（三、三〇）—三、五五）—千早村（四、四〇）—五、〇〇）—定
期自動車—富田林（六、一七）—阿部野（六、五〇）—
歸定（八、五〇）

関西の山の尾根縦走位つまらないものはふい。
拓け過ぎてゐる癖又誤のわからぬ所が多い、下ら
ない所に指標があつて肝心の所におい、葛城の三
角点で御所町のサイレンの音をき、時計を合せた、
山の頂上で時計を合せた事は生れて初めてだ、南
河内の村々では丁度年二度の大祭りで山車が沢山
出てゐた、歸りに千早から自動車にのつたら狭い

道一杯にそれ等が動いてゐる、首い具合に
査公が二人自動車の外側に乗つて呉れたの
で一杯気味の田舎のオッサン達も遠慮して
除けてくれた、普通ふら三十分で行ける所
を一時間許りかゝつた、然し運轉手の云ふ
にはこれであつた、山ノ神でも乗つてくれねば
何時間かゝるかわからふいさうだつた山の神
も時にはいい、道具にふる、けれども田舎の秋は
流石にい、柿が赤く稲が黄ろく、杉の森の中か
り山車の太鼓がドンドンと聞えて来る、村
の姉さん達も今日は他所行の着物、千早の辺りの
女達は楠公の後えいかどうか知らぬが美人が多い、
上品な顔かたちが多い、トンちやんも感心して
居たからうそぢやない、
（熊）

秋

九月の末五十嵐と伊賀の室生寺へ、寺は女人高
野として昔から、けれどもその御利益よりも故事
よりも赤目に巡いこの谷の面白さから、往きは谷
を歸りは山道を杉の木立に、三里足らずの標原を
五時半の電車に乗るつもりで出たのが途中で駄目
と分り、六時半のふらゆつくりと行く内それと怪
しくあつて、街道に出たが歩いてゐられず、工事
中の参宮急行、トンネルもあつた鉄橋も、そうそ
うどつかと腰を新しい枕木に卸して、二人が弱く

おつたのを歎いて、夕暮しの空が山の端の紫と赤くおつて、この辺はその田舎らしうの裡に歴史に依つて洗練された何物か、それは奈良の平野にも山田の天地にもあつたと考へてゐる内に六時半が過ぎた。とぼ／＼と七時半のにそれとやつと間に合つた二人の足には、そのたど／＼しうの裡に山の歴史に依つて洗練された何物か、果してあつたかあつたか。

十月の初め店の旅行で天の橋文へ、橋立は二度目。けれども更けてから長い松原に自分の影を踏んで仰ぐ秋の月には自分の姿が映る様だ。十月の月を見てゐると身が何だかこう締つて来る様ふ氣がする。締るのが胃かも知れあ、そういへば胃も俺の小食にあんまり文句を言はふかつて来た。脳かも知れない、道理で今迄の俺が恥しいや、迄藤が北尾根の句を、誠に名月とは有難いものだ。十月の末親艦式。豫行の日に軍艦に乗つて見て廻つた。アメリカなんか何だと思つた、そのときは銀行員だつて海軍におれるだらうふと思つた。矢張り日本人だといふ処だがほんとは不景氣だからだらう。拝観者の引つ張りつゝ、阪急は山からひと目に見下ろせるといふ。阪神は浜から手に取る様に見えるといふ。けれども俺はゆうべは前の浜でサードライトを見たし、けさは屋根に登つて式をすかり見ちやつた。港の下宿の恵みである。

(ハッタ)

鞋

僕は豫料の間は登山靴を買えなくて鞋をばいて山へ行つた。

漸く靴が買えろと出るとすぐ汽車賃になつてしまつたので到々買えなかつた。外が鞋は履き様が悪いとすぐ踵が外れて仕方が悪い。右の方が踵から形が崩れて来ると左の方は外側の方が破れて鞋が段々伸びて来る。

此の伸びて来た鞋程氣持の悪いものはない。足の裏が鞋と別々に行動を取る様になると思切つて新しい鞋と取換へなければならぬ、處が此の鞋で奴を腰に三足も四足もぶら下けて歩く位馬鹿らしいものはない。

豫料二年の時いつぞ鞋なんか履なくても、よい位の足の裏を厚くすれば少し厚味の足袋で間に合ふだらうと前の成城中學の庭を蹴足で走つて硝子で足を切つてしまつた。足の裏を厚くする考はそれ以来漸念してしまつた。

然しどうも鞋の豫備を待つて行くのがいやでいやで仕方ない。列々、オッ、ク、ロ、をねだつて鞋の造り方を教えてもらつた。

何しろ明治初年の田舎育ちの僕の母は鞋は口の先で、は忽ち造り上げてしまふ位充分に心得て居るんだ。

此時以來約一週間僕は専心裏の物置に、もつて鞋の製造に没頭した。

そして一週間後僕は十足の鞋を物置にぶら下げ
て密かに会心の笑を浮べた。
皆んな板の様に堅い堅牢そのものゝ如きもので
ある。此の位丈夫な奴なら「アルプス」に行くの
だつて一足の豫備で充分だと思つて居た。或日學
校から帰つて何時もの通り物置の鞋を見物に行つ
た處が驚いた奴。

どうも此の二三日ぶら下げてある鞋の形が段々
変つて来た様だとは思つて居たが今日の前に下つ
て居る鞋は何たる事であらう履きもせぬ内から皆
んふ一寸位伸びて浅草の仁王さんの履く様な大鞋
になつて居るではないか。僕はてつかり鼠の悪戯
と直観して驚愕の余り物置の隅や炭箱の裏を登山
棒で突きまわつた。

そして母に物置に鼠の居る事を嚴重に抗議に及
んだ迄はよかつたが後がいけない。

僕は鼠の悪戯をより大に誇張す可く一着伸びた
大鞋を母の處に持参した。

然し此の一着伸びた大鞋が僕の鞋の製法に最悪
の欠陥のある事を一着明白に表現して居たんだか
ら結果は正反對にあつてしまつた。

實際あんな堅牢な鞋が一度も履かずに駄目にな
つた事は返す／＼も残念で致方なかつた。此の欠
陥が踵の「シメ」に存して居る事が分つて以て僕
の鞋は決して伸びない鞋となつた。
僕は嬉しさの餘り文山に行く三井君に二足わづ

わづ上野駅迄持つて行つてやつたりした。
此の伸びない鞋は登山靴を買つて以来未だ僕
から忘れられてしまつたが思ひ出をのみ追ふ今日
此頃の僕にとつては又懐しくも蘇返つて来た嬉し
い幻影である。

(一九三〇、一〇、一四夜) 狸

ほんとにあつた話

動物では化けるといふ映画では「メークアップ」並
居では「つくり虫」類では「變態」といふ。つまり他物の
形態に似せる能力を本能的に有してゐると傳へら
るゝ「Kちゃん」が化けてゐると見られて困つた話。

折は日本橋浜町大川端、狹斜の巷に唯一軒黒塀
を纏らした森閑した邸宅の玄關先

時は秋の夜も更けた十時頃。半後の月は江東の
空に黄金色にかゝつてゐる。何處からともなく洩
るゝ瓜弾きの音、犬の遠吠。

あんまり逆居がかるゝ孫さんの話と同視するゝ
虞があるから卒直に申上げます。

Kちゃんも急用あつて此邸の若旦那徳さんを訪
れたのです。徳さんは目下弟議中の洋モスの重役
さんふので弟議團がデモに末たり暴力團が強請り
に來たりする。中でも寄宿舎で革命歌を唱つて三
面記事を賑はせた女工連が大擧して奥様に會はせ
て呉れと押かけた時ふんかは女房奉行で有名な徳
さんあの大目眼玉を白黒させたとの事。

それやこれや、玄關番初め女中連皆訪問客に對して神經過敏にかつてゐたのです。そこへ現はれたのがKちゃんだ。

服光燭々としてロイドの眼鏡越にがうりと覗き、
 丸々と圓々しい山友の俺達でも僻易する。又俺達
 眞実不彼の扮装俺達と同じく兎角江東佐民並だ。

そのKちゃんも夜更けて若旦那に會はせて呉ん
 ねえといふのだから玄關番考へた。弟談圓の幹部
 とすると大抵主義者だからもつと神經鋭敏の筈だ。
 まあ何処かの暴力団だらうといふ事につて奥へ
 入つて行つた。さあそれからが大変だ。女中下男
 女中等々々廊下をバタ／＼入れ替り立ち替り見に
 来る。早く尻尾を出せと云はん許り。Kちゃん幸
 にして狐でも狸でもなかつた。

Kちゃんすつかり憤慨した。然し遂に本態が明
 かふり目出度若旦那に會へたとの事。
 (華蓮)

目出度い話

針葉樹會山のローマンス第三巻の主役P君と山
 歩きの帰途列車中東京の女學生の一團と乗り合せ
 た。何処のレグズ一團だといふ聞いて怒られた奴モ
 本筋い。

P君煙草を喫むとノースモーキンググループぶ
 んで遣り込められる。その後しさ。その喧噪。す
 っかり迷惑した。
 俺も耐り兼ねて

「こんな奴等を女房にした男は不幸だね實際東京
 の女學生は一寸考へものだね」
 同意を得ると思ひきにては如何P君稍暫しの思ひ
 入れ

「けれど東京の女學生にも種々あるさ。田舎の
 奴は都會の風を染み込ます迄が大変だよ」

次に食物の話が出た

Pちゃんも職黨なのは以前から識つてゐたがう
 イスレーバソースをかけて食ふには驚いた。大枚
 五十銭を奮発して寶漿豆の罐詰を買つて行つたの
 に食つて呉れぬ。

「Pちゃん見たいに甘い物が嫌いがやううが
 困るぜ」

Pちゃん又も暫しの思ひ入れ

「丁の家も鹹好きだよ。何せ職工が沢山居るだ
 らう。だから家の者も皆が鹹いものが好きにふつ
 てゐるよ」

何も知らなかつた俺には何が何だか狐につま
 れた様だつた。

然し後で談てが氷解した。

諸兄よPちゃんと話をする時は注意し給へ
 それと共に丁ちゃんよ。兄が妹君の幸福を度び
 給へ。
 (華蓮)

僕の所でも愈々生れた。予定より一週間程早か

った二三日から下痢したのが原因らしい。下痢の原因は中将湯に在る。平常飲んで居るなり差支ないかも知れないが平常少しも用ひておい者が疲れた事をするとは身体に障るらしい。産婆もそれが悪かつたと言つてゐた。あんなものを飲まよりは冷えない様にして居た方が良いらしいと、併母子共に健在だから御安心下さい。僕に似てゐるさうだ。酷似してゐるとは誰でも云ふが僕にはそんな氣もしない。只頭が僕の様にハゲ上るらしいところが似てゐる。兎に角未だ父にふつた氣がしない。自身未だ子供なのだから併し追々周囲から親にさせられてしまふのだらう。

(トシ公)

うつせみの世にすがたをかりの身にしあれば、ふと、かりそめのさほりより身はいたつきのもの、といった時ののはかふくもあやしい話をしようか。さて皆様、おれきれき様の御面相を拜観するに、皆笑ふ子も泣き、泣く子は尚泣き、夜叉も三舎を避けて……それ程でも御座いませんでせうが、いづれを見ても、まづ、山家育ちの様に思はれます。で、その方々の心理的欠陥に引き較べへ何？心理的欠陥が無いと抑せらるゝ？いや、そうお考へにふる所が既に膏盲に入つてゐるのぢやて、肉体的の頑健さたるや、真に顔面以上で御座います。が、それが、はかあい浮世のことゝで、人は病

の器とか、英雄も病に勝てぬとか申しまして、こんふ方々にも医者と相談する所があるのに何の不思議がありません。処が、それが大ていは怪我、外傷に非ずんば栄養器官、消化器の病であるのに、凡そ、その人柄の奥ゆかしさが惚惚されます。例へば、蛇で脚を切つたとか普通なら此の人は脚で蛇を切り性直の人ですが此の時不幸、天魔に魅入られたとでも云ひませうか？ボールで眼を傷つけたとかへこれ此の人の顔なりばボールをはね返すだけの組織はあつたのですが、唯眼だけ弱かつたのは、ジグフリードの背中の急所とでも云ひませうか、或は眼は心の窓と云ひますから、心の偽りのない弱みが見れたとでも云ひませうか？云ふ様な般般遠からず御座います。また他方、病は口より入る方では、酒を飲んだり、海に泳いだりするとへ但し此の両者共に何等因果関係なしに皮膚上、赤色斑点粒々として起るも猶且つ、牛飲馬食を辞せぬ慢性胃腸病者もあり、ば、盲腸の虫様突起とかの病に呻吟した人もあり、極く卑近な例では、盲腸未だ最丈なるに周囲既に陥落して炎症を起し五日間すや／＼と床上に横たはり、六日目には網膜に食慾を感じたつてゐることも想像されぬこととはありませんでせうね。惜て此処に不思議なのは是等原則に反する謎の存在、KONちゃんやんの覆乱です。その起るや忽ちにして元氣を失ひ、顔色あをがめへお、何とその

時の彼の顔貌の人間に似たる——泊るや忽ち嬉々として戯れへおい、何とその時の彼の顔貌の……知る人ぞ知るです。今度白馬に一所に行く時いぢめられると困るからよします。)

ありかしこ。(ペン)

一人歩き

朝一番で出かけて大岳山から光明山へのゴツゴツした所を歩いて見ようおど大それた考をしてゐたが、やつぱり起きたら九時近くおんで忽ち方向を変つてしまつた。一人でグー／＼出かける時は遅れでもかまわおいし、方向変換も自由だ。併し歩いてゐる時はそんな具合に行かぬ。これは自分だけかも知れぬが多数の時よりは遙に規則正しく進む。従つて心せわしい。大体予定時間を立てて置くから自然その通りに行こうとするので或る時はあわてゝ走り或る所は馬鹿にゆつくりしてしまふ。さてその日は高水三山と変へたんだ。沢井で下車して惣岳山への尾根道をどん／＼でもおいが登る。谷から尾根に出ると急に眺めが良くなつたので休んでゆつくり眺め様と思つたが何だか一人歩きは先が急がせられるのもつと鬼眼のよい所が上にある様の気がして登る中にと／＼頂上近くおつてしまつた。祠の下から清水の湧つてゐる所でどつかり祠の台に腰下して中食にした。一の男が下つて来た。彼も亦此処で残りの飯を食ひ

始めた。彼はもう帰る所で今頂登り始める奴があるものかとうきんくさ、うに見てゐる。彼は一流の山歩き家らしく余り親しく話をしようとしふい、俺も瀧だから大家らしい威厳をそこおわせまいと話かけおい。二人共黙々として飯を食つて月並の天氣の諸位で上と下に別れた。こんな時程つまりぬ事はおい。

惣岳の頂上は薄暗くつて一寸落ちついてゐる。社がもつと小さいと未だ感が出さうだ。岩葦山一面の柴原だ。頂上に行つたら大岳の方も、川乗もそして武藏の平野の方も眺められるかも知れおいと三角点の所まで登つては見たがまるでつまらおい。すたこら退却して高水山に来た。此処は又大菩薩峠の小説を思ひ出させる様の森閑とした。よい所だ。古木の茂み、古いが汚くおい建物何処でも薄ぎみ悪い剣刺の場面にふりさうだ。只猿の檻と偉大の石碑が玉に傷だ。降りには二俣尾に下る横りで小門をくづつて杉の並木の急坂を兩にせかされと下つて行く。街道に出た頃は猛烈の砌とふつてしまつた。大木の下に避難したがやつぱり濡れるので山際の竹林に此処おら大丈夫だらうと宿を移して見たが此処も遂に陥落してとう／＼たまらず家の軒下へ飛びこんでやつと救はれた。小一時間もして雨は上りかけた。日が出て来る、山と山とを結んで綺麗な虹が下平の谷の上にかゝつた。い、気持ちふつて虹を眺め

ながり下つて行つたまではい、がどうも変だ。一時間歩いて此処は何処だといと聞えたら滝成だといふ。異ふはづだ青梅から名栗への街道に出ちやつたもの。日は暮れて来る。青梅へ二里半、飯能へ三里の道を猛烈のスピードでかけ出した。

(三角)

消 息

村尾金二、十月の針葉樹會の晩から一週間、盲腸周囲炎を病ふ。

五十嵐敬馬、十月十八日男子出生す、名は徹君と云ふ。

小栗吉雄、九月末か十月初めに上京した由だが會へふいで残念だった、現在支那方面に出て居る。

松本謙三、婚約成立し、結婚を済ませた。

記 録

自九月二十一日至十月三十一日

九月下旬 伊賀室生寺、渡辺九郎、五十嵐敬馬、

十月四日―五日 谷川岳、奥野綱重、中川深一、高橋要二、

西黒沢を下り

十月五日 高水三山 松本謙三
十月十七日 金剛山 吉沢一郎、五十嵐敬馬
十月十七日 武州御岳 松本謙三

昭和五年度第一期會計報告

(昭和五年四月―九月末日迄)

収 入		支 出	
前期残額	四、一五	部屋代	七、八〇
第一期分会費	二八、〇〇	茶菓代	二一、九〇
前季未納徴集	一、〇〇	第一号会報代	七、〇〇
部屋代	五、四〇	計	三六、七〇
一橋山岳部負担額	七、六〇		
計	四六、一五	本期残	九、四五

備考

(1) 昭和五年第一期會計は帳簿組織の工合により地方会費と在京会費と明確なる区別を為すに至らず此の点遺憾、然し大体に於て会報支出額は地方会費を超過せりもの、如し(第三号分送)

(2) 部屋代は收支相見合ふ可きものあり、即ち一橋山岳部負担額の内二、四〇を部屋代と見て可ふり

(3) 第二期より部屋代は正確に同額とあり可き筈あれど若干は差異を生ず可し(八何とあれば如水会館の鈴木さんが出席人数を誤

って少く見續つたり、又時には誤つて部屋代を拂はず歸りたりする方がありますから。

編輯後記

一、針葉樹会員があるべく皆でそろつて何処かへ行き度いと思つてゐたが今年は遽に駄目にあつた。十一月の二日籠りの休日と思つてゐたのに各自思ひ／＼のプランを立て、しまつて遽に駄目にあつてしまつた。それで来年の正月は五日間流れて休みで熊の湯に行こうと云ふ連中が既に六、七名もあるから此れを機会に関東関西連合に針葉樹会大会を開き度いと思ふ。浦松氏も早く鹿島槍の方をすまして来てもらい度い。五十嵐も子供が出来たばかりでも何とかして出て来たなら高木も皆が長いこと会はふいのだから余り女房奉行をせないで来たなら、曾田大人森竹君は勿論の事、村瀬も存在を明かにする為に出て来ふいか、魁木もうへとつちめられた後だ少しは延びても親父も大目にて見てくれるだらう。孫さんは当然輪カンで新出張の事と大いに期待してゐる。矢作もいくら工場だつて正月位は休みだらうね。

二、昭和五年度後期分会費、針葉樹売上代金は言論山十屋建設基金もふか／＼集まらぬ、日頃の不精も大抵にして早く出さふいか、近ぢやんは

経営資金にほと／＼困つてゐる。

三、兎角記録並に消息の記事を御通知願ひたいので回ります。原稿を書く余裕はふくとも記録は一寸葉書にでも聞かせて貰ひ度い。

(係より)

(終り)